



Data 2022-97

監督・脚本：セリーヌ・ヘルド／ロ
ーガン・ジョージ

出演：ザイラ・ファーマー／セリー
ヌ・ヘルド／ファットリップ
／ジャレッド・アブラハムソ
ン

👁️👁️ みどころ

ロマンチックな邦題をつけた本作の舞台は、地下鉄が走るニューヨークのさらにその地下。この母子は、なぜそこでホームレスとして暮らしているの？

そんな地下空間から脱出した母子の絆の物語は感動の涙を誘うはずだが、残念ながら私にはイマイチ。『翼をください』や『地上の星』の歌詞には共感できても、「もうすぐ翼が生えてくる」という本作の設定（嘘）はどうも・・・？ また、地下鉄ではぐれた時の“危機管理”くらいは、しっかりしておかなくちや・・・。

—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————

■□■ロマンチックな邦題に注目！■□■

本作の原題は『Topside』だが、その邦題は、絵画的な情趣いっぱい(?)の『きっと地上には満天の星』。この邦題を見た団塊世代のじいさん・ばあさんは、きっと、荒木一郎が歌って大ヒットした『空に星があるように』(66年)を思い出すはずだ。フォークソング全盛時代のトップバッターになった同曲は、何ともロマンチックな恋愛ソングだったが、さて本作は？

チラシに躍る「NYの街の奥底で暮らす母娘の、心震える愛の物語。」「地下鉄の廃トンネルで育ったリトルは、まだ夜空を知らない——」「母と娘の強烈な愛の物語。」等の見出しを読めば、それだけで本作は必見！

■□■地下鉄網のさらに下の広大な地下空間とは？■□■

ドストエフスキーの小説には『地下生活者の手記』があり、近時の有名な映画にはポン・ジュノ監督の『パラサイト 半地下の家族』(19年)、『シネマ46』14頁)があるが、ニューヨークには地下鉄をはじめとする広大な地下空間の下に、さらに迷路のように横たわる広大な地下の世界があるらしい。

ちなみに、私は大阪に水害を防ぐ“神殿”ならぬ「地下トンネル」があることを、近時のニュース番組ではじめて知ることができた。この取材は、大阪府東大阪市の若江立坑で行ったもので、ここが全長13キロに及ぶ「寝屋川南部地下河川」の起点になっているそうだ。その仕組みは、豪雨で下水道の処理能力を超えた水を集めて大阪湾近くまで流し、ポンプでくみ上げて川に放出するというものだ。

膨大な費用をかけたこの“地下河川”設置工事は目的の明確なれっきとした公共事業だが、本作に見るニューヨーク地下鉄の下に広がる地下迷路は一体ナニ？その整備のために、住民の立ち退きを含む公共事業が必要なことは当然だが・・・。

■□■そこで暮らすホームレスたちは？■□■

『パラサイト 半地下の家族』（19年）の冒頭では、携帯の電波の届くところを求めてトイレの上に座るシークエンスの中で、韓国で有名な（悪名高き？）「半地下世界」の実態を垣間見ることができた。2022年の夏に日本列島を襲っている水害は大変だが、韓国の半地下では、それはもっと大変らしい。

本作ではそんな水害の姿は描かれないが、冒頭から暗いスクリーンの中、手持ちカメラで撮影される、地下空間で暮らすホームレスたちのコミュニティが描かれる。5歳の娘、リトル（ザイラ・ファーマー）と共に暮らす母親ニッキーは、本作が監督初となったセリース・ヘルド自身が演じているそうだが、これはかなりの美人。ところが、何と彼女はコカイン中毒らしいからアレレ・・・。

ドストエフスキーの『地下生活者の手記』はかなり鬱陶しい小説だったが、遠くから当局による“立ち退き”を促す声が聞こえてくる中、ニッキー、リトル母娘と周辺のホームレスたちが暮らしている姿もかなり鬱陶しい。そんな本作の導入部を観ていると“問題の論点”はすぐにわかってくるから、そんな薄暗い中での鬱陶しい姿が長々と映し出されると、さらに鬱陶しさが増してくることに・・・。

■□■もしも翼があったら？それが本作のミソだが・・・■□■

日本の1980年代のフォークの名曲に「赤い鳥」が歌った『翼をください』（71年）がある。「もしも、大空を自由に飛び回れたら・・・」という誰もが抱く夢をテーマにした同曲は卒業式等でもよく歌われるが、人間が翼を持つことはあくまで夢。飛行機の発明はその夢の実現だが、本作ではニッキーがリトルに対して、「大人になったら背中に翼が生えてくるから楽しみに」と教えているところがミソだ。「すでに翼が生えている大人は通常それを畳んでいる」というニッキーの（嘘の）説明を信じ込んでいるリトルは、自分の背中にいつ翼が生えてくるかを楽しみに、暗い地下空間での日々を送っていた。

しかし、リトルの背中にまだ翼が生えていない今の段階で、強硬に立ち退きを迫る当局の圧力の下、ニッキーはついに地上への脱出を決意することに。しかして、その方法は？そんな本格的なストーリーを展開していくについては、なぜニッキーが今ここで生活しているのか、等々の諸前提について教えてもらいたいところだが、本作はその説明が不十分

なまま進んでいく。しかし、脱走過程の中で少しずつ、それが明らかにされるので、それにも注目！

■□■母子が地下鉄ではぐれた時の“危機管理”は？■□■

ニューヨークの地下鉄網の実情は知らないが、東京でも大阪でも日本の地下鉄網はすごい。とりわけ大阪では、2011年の橋下徹大阪市長の登場後、エレベーター、トイレをはじめとするその快適さは飛躍的に改善されている。

それはともかく、はじめて地下鉄に乗ったリトルが、母親と一緒にいたとはいえ、いかに戸惑い、怯えたかは想像に難くない。広大な地下空間から逃げ出したニッキーは、これから一体どうするの？それが明確にされないまま、本作では動き始めた地下鉄の扉が閉じられたある瞬間、ニッキーとリトルが行き別れてしまうことになったから、さあ大変だ。ここから、スクリーン上には、取り乱すニッキーの姿が延々と映し出されるが、それって少し変！なぜニッキーはリトルに対して、「迷子になった場合には、はぐれた場所から動かないで！」と教えていないの？また、本作中盤に見るニッキーの取り乱す姿は一体ナニ？これは、コカイン中毒患者らしい姿を見せるニッキーの姿とともに、私が本作に全然共感できない根拠になっている。なぜ、こんなストーリーが成立し、なぜ『きっと地上には満天の星』というロマンチックな邦題が成立するの？

ちなみに、「風の中のすばる、砂の中の銀河」の歌詞から始まる、中島みゆきの名曲『地上の星』はテレビ番組『プロジェクトX～挑戦者たち～』の主題歌として作られたものだが、そのスケール感はずごい。それに比べると、『きっと地上には満天の星』と題された本作は・・・？

2022（令和4）年8月15日記